保育・教科部会の成果と課題

1　はじめに

本学校園では，幼小中一貫教育の11年間の学びを通して，「確かな学力」の育成をめざし豊かな「学び」をつくる子どもの姿の実現に向けて研究に取り組んできた。昨年度，保育や教科において育てたい思考力・判断力・表現力を明確にし，11年間を通して育てたい力との関連を図った。また，問題解決の過程において，子ども同士がかかわり合うことは，思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりする上で有効にはたらく学び合いとなった。そこで，今年度は，保育・教科ごとに，附属学校園で育てたい思考力・判断力・表現力を教育研究ブロックごとに整理し，11年間のつながりを明らかにするとともに，思考力・判断力・表現力を育成するために学級全体での学び合う場面の構想や，教師のはたらきかけについて具体的に検証することにした。

以下に，保育と各教科の実践から今年度の研究の成果と課題をまとめた。

2　保育・教科部会の成果

(1) 思考力・判断力・表現力を，保育・教科ごとに教育研究ブロック別に整理した11年間のつながり

今年度，本学校園全体でとらえる思考力・判断力・表現力を教育研究ブロック別に定めた上で，保育・教科ごとに思考力・判断力・表現力を教育研究ブロック別に整理して，11年間のつながりを明らかにした。その結果，保育・各教科の特徴を踏まえた上で，保育・教科の枠組みを超えた子どもの発達段階の特性があることが次のように分かってきた。

初等部前期での，保育や各教科における思考力・判断力・表現力をまとめると，子どもの学びの対象となるものが遊びや生活と密接に関係しており，「やってみたい」という子どもの自発的な学びの意欲が追求の原動力となり，没頭して遊んだり体験したりすることによって自分なりの思いや考えを確かにもち，それを素直に伝え合おうとする力であると言える。伝え合う手段としては，言葉だけでなく，絵を描いたり身振り手振りなど体を使った表現もある。初等部後期では，子どもの学びの対象は，身のまわりの生活に関わる具体物である。この発達段階の子どもの思考力・判断力・表現力は，学びの対象に直接はたらきかけて自分なりの考えを明確にし，友だちの考えと比較したり考えを取り入れたりしながら，多様な表現方法を用いて工夫したり説明したりする力であると言える。中等部では，子どもの学びの対象は大きく広がり，社会的なものや抽象的なものなど様々である。この発達段階の子どもの思考力・判断力・表現力は，学びの対象に対して自ら問題を見いだし，様々な考えを取り入れながら論理的に考えたり一般化しながら最適な方法を見いだし，相手に伝わるように発信していく力であると言える。

思考力・判断力・表現力は互いに関連しあって育成される力であり，保育や各教科における学びと各教育研究ブロックの発達段階において関連しあって11年間でつながって育成される力である。初等部前期の思考力・判断力・表現力が素地となり発達段階を踏みながら，何度も問い直しをしたり学び直しを繰り返したりすることでじっくりと育成される。１つ１つの歩みは遅々たる歩みであっても，保育やすべての教科における11年間の取り組みによって，本学校園全体でとらえる思考力・判断力・表現力の育成につながるものと考えられる。

(2) 思考力・判断力・表現力を育成するための学級全体での学び合いの構想や教師のはたらきかけ

①思考力・判断力・表現力を育成する学び合いのための単元構成について

思考力・判断力・表現力を育成するための学級全体での学び合いを成立させるためには，活動・単元構成レベルで学習過程をつくりあげることを大切にしなければならない。課題との出会わせ方はどうするのか，環境・教材はどうするか，学級全体での学び合いの課題をどうするかなど，活動・単元を構成していく要素はたくさんある。社会科では，単元レベルで原則的な追求の流れを明確にすることを大切に考え，単元構成は，教材との出会いから問題の発見へ，そして問題の追求が続く流れで学習していく問題解決的な学習で成されると教科構想で述べている。その上で，小学６年の実践では，金閣寺と銀閣寺の違いから当時の将軍の権力や時代の流れに目を向かせることで単元に導入し，学び合いの場面では，平安文化や室町文化と現代のくらしとのつながりについて考えるという単元を構成した。その結果，子どもは各時代の文化のよさをより深く感じることができたとまとめている。

追求の流れを明確にして単元構成を考える社会科と同様に，理科では，単元を貫く柱を中心に構成を考えており，国語科では，単元で習得させたいことばの力を明確にして単元構成を行うことを考えている。一方，技術・家庭科や体育・保健体育科では，単元の中で，段階を踏むことを大切にして単元構成を考えている。これらは，教科の特性であると考えられ，同じ教科でも，単元の内容によって構成が変わる場面がある。

②思考力・判断力・表現力を育成する学び合いのための教師のはたらきかけについて

子どもは学習の中での問題や課題に出会ったとき，その子なりの考えや思いを抱く。自分の考えや思いを他者に表現する活動を取り入れることは，思考力・判断力・表現力を育成する上で有効であることは昨年度の研究から明白である。他者へ表現したことについて，教師がどのようなはたらきかけを行うかは，表現した子どもにも，一緒に学習している子どもにも重要である。

保育の実践において，子どもの「楽しかった！」という思いを認めた上で，「どこが楽しかった？」「どんな気持ちだった？」などと遊びを振り返ることができるようにして，自分の考えを確かにもたせるはたらきかけを行っている。小学４年算数の実践において，子どもが自分の気づきを思うように表せず全体で試行錯誤している中で，「“こうすると”って，どうすること？」「まっすぐになっているってどういうこと？」と，子どもの表現がより具体的になるような教師のはたらきかけによって，学び合いの中で，誰もが納得する簡潔で明確な表現へと変容させている。外国語活動・英語科では，教師は子どもたちの学びをコーディネイトするような存在としてかかわっていこうと考えており，理科では，子どもの発言に対して評価するのではなく，復唱・要約・引用などによって子どもの考えをつなぎ思考を深めさせようと考えている。このような学び合いにおける教師のはたらきかけによって，子どもの思考は深まり，学級全体の学び合いによって，一人ひとりの学びが変容すると考えられる。

③思考力・判断力・表現力を育成する学び合いのための視点を明確にするはたらきかけについて

昨年度の研究で，子どもにかかわり合いをもたせることは思考力・判断力・表現力の育成に有効であることがわかったが，ただ単に，自分の考えを発表させたり，グループでの取り組みの発表会を開いたり，友だちの作品を鑑賞する機会をつくれば，思考力・判断力・表現力が育成される学び合いとなるわけではない。自分の考えを友だちに分かるように説明しようと思考を深めたり，友だちの考えを自分の中に取り入れたりすることができても，まだ不十分である。教師は，学び合いのための視点を明確にもつことが重要である。

小学４年体育の実践において，幅跳びで遠くに跳ぶために「ふみきり」に視点をしぼると，子どもがふみきり板の真横から床に顔を着けるような姿勢で見始めるようになり，他の子どもへ広がった。さらに，着地に視点を向けることでねらいがはっきりして，具体的な声かけなどかかわり合いが高まった。中学３年理科の実践において，課題に対して，はじめは様々な意見が出て何から考えていいのか分からなかった子どもが多かったが，焦点化することによって子どもたちによって自然と結論へと導かれていった。子どもの科学認識が何にもとづいているのか明確にし，何を変容させれば子どものつまづきの打開策となるのかを視点として与えるはたらきかけが有効であった。一人ひとりの学びを変容させ，単元の目標に迫る学び合いの視点を明確にして子どもに与えるために，子どもの発達段階を考慮した上で，子どものとらえを教師がしっかり把握しておくことも大切にしたい。

3　今後の課題

本学校園では，思考力・判断力・表現力は，お互いに影響し合い，補完し合って伸長するものだと考えてきた。今年５月文部科学省から「小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」の通知があり，思考力・判断力・表現力を一体的に評価する観点が示された。平成24年度の新学習指導要領完全実施に向けて，学び合いにおける思考力・判断力・表現力をどのように評価していくのか検討をしていかなければならない。　（文責　高橋　里美）